

決断の時は今。

羊として死ぬか、侍として生きるか？



貴方の愛と勇氣が日本と世界を救う

現代日本の「最大の悲劇」は、被害者である日本人が、その事実にもっと気づいていないことです。

いや、むしろ日本人は日々、忍耐を続けながら、「自分たちは過去、侵略と虐殺を犯してきた加害者である」と、そのように錯覚させられております。

後に詳しく説明いたしますが、日本人は意図的に、ある者たちによつて、「無関心」にさせられてしまっているのです。

そして意図的に築かれた「無関心」によつて、日本国民一人一人の政治に対する知識は、全体的には少しも増えてはいません。いや、むしろ時間が進む度に、日本人全体的には、政治に対して、より「無知」になっていっているという現状にあるようです。

つまり日本人は今、ある者たちによつて、意図的に「無関心」にさせられることで、意図的に政治に対して「無知」にさせられてしまっているわけです。日本の大人たちが、政治に疎いのは決して偶然ではないのです。

そして日本人が、政治に「無知」にさせられてしまっている結果、政治に対する「沈黙」が、北海道から沖縄まで横行しているわけです。ですからこの「沈黙」も、けつして偶然の産物ではなく、ある者たちによつて、意図的に築き上げられたものであったわけです。

黒人に対する人種差別と戦ったキング牧師は、かつてこう述べていました。「最大の悲劇は悪人による暴力ではなく、善人の沈黙である」と。すなわちある者たちによつて意図的に「無関心」にさせられ、意図的に「無知」にさせられ、意図的に「沈黙」させられることで、「最大の悲劇」が今、日本で起こっているわけです。

冒頭で「現代日本の最大の悲劇は、被害者である日本人が、その被害にもっと気づいていないことです」と述べましたが、この「最大の悲劇」も、やはり偶然に築かれたものではなく、ある者たちによつて意図的に築き上げられたものであったのです。

それをこれから説明してまいります。

税金の詐欺

現在の日本では、数年おきに消費税が上がっていますが、実は政府は『経団連』や『経済同友会』の意向を受けて、16%、25%と、さらに消費税の増税を行おうとしています。しかし国会で議論している税金は、タテマエ予算ばかりで、その背後にあるホンモノ予算はまったく議論されていません。その額は「一般会計」が約100兆円であるのに対して、「特別会計」は約400兆円ですから、実に4倍です。「一般会計」と「特別会計」は複雑に、相互に、行ったり来たり、繰り入れ代えられているために、日本の国家予算の純計額は約240兆円なのです。

2002年、民主党の石井紘基議員は、「特別会計」がどうなっているか、それを国会で明らかにしようとしたら、その三日前に刺されて殺されてしまいました。殺したのは、「右翼」を標榜する在日朝鮮人の暴力団員で、その犯人は、刑務所の中でテレビの取材を受けて、「4500万円をもらって殺害を頼まれた」と明確に答えております。

通貨発行権の詐欺

円を刷っている『日本銀行』、ドルを刷っている『FRB』、こうした中央銀行は、実は民間の株式会社です。『日銀』は株式市場『ジャスダック』にコード銘柄「8301」で上場している会社であり、株主が誰であるのか明らかにしていません。

では、『日銀』や『FRB』といった中央銀行の上に君臨して、世界中のお金の蛇口を握っているのが誰かと言えば、スイスのバーゼルにある『国際決済銀行・BIS』なのです。つまり数円、もしくは数セントの紙キレを、一万円札や100ドル札に変えることのできる力、それが「通貨を発行する権利」、「通貨発行権」なのですが、なんとその「絶大な権力」が日本政府や米政府にはないわけです。

そしてこの『BIS』も、ホームページで調べて、国際電話をかけてみれば分かりますが、スイス政府や国連などとも関係のない巨大な株式会社なのです。「なぜアメリカでは6人も大統領が暗殺、もしくは暗殺未遂に遭ってきたのか?」、この謎を追っていけば、自然と国際金融の闇が見えてきます。だから「自動車王」と呼ばれたヘンリー・フォードという方は、こう述べていました。

「この国の人々の銀行や金融への不理解はもうたくさんだ。もし金融の仕組みを理解したら、明日の朝までに革命が起ころだらう」

あるいは今から百年ほど昔の1930年、経済学者のジョン・ケインズという方は、次のようなことを述べていました。

「およそ100年後には、ほとんどの経済的問題は解決されてしまい、人々の悩みは余暇をどのように使うか、ということになるだろう。『孫の世代の経済的可能性』」

このケインズの言葉からお分かりのように、一流の経済学者たちが、国際金融の闇を知らなかったわけではないのです。ページの都合上、詳しく述べられませんが、特にケインズは確実に「金融詐欺」に気づいていました。ですからヘンリー・フォードの言葉にもあるように、もしも日本人が「無関心」をやめて、「特別会計」や「通貨発行権」を理解したら、明日の朝にでも、お金に苦しむ時代は終わりを迎え始めるのです。

癌治療の詐欺

日本では今、癌で亡くなる人は年間に約40万人、一日に約千人です。しかし「そんなバカな！」と思われるでしょうが、実は癌は治ります。ドイツのDr. レオナード・コールドウエルという医師は、次のように豪語しています。

「90%以上の癌は数週間のうちに完治し、手術も放射線治療も化学療法も必要ない」

「癌細胞はブドウ糖をエネルギーとする」、これは1931年にノーベル生理学・医学賞を受賞したオットー・ワールブルグ博士が解明し、1923年に論文で発表し、すでに証明されている科学的事実です。

しかし現代の日本の癌治療では、わざわざブドウ糖を点滴しています。摘出手術、抗癌剤、放射線治療、これらの「癌三大治療」によって、癌患者の体力が弱まった時、日本ではわざわざ癌のエサであるブドウ糖を点滴しているのです。そんなことをすれば癌患者は亡くなって当然です。

また、「実はビタミンCが癌細胞を殺す」、これもノーベル賞を2度も受賞されたライナス・ポーリング博士によ

つて、1970年に発見された驚くべき癌の治療法です。美容や健康のために数グラムのビタミンCを点滴することがありますが、その数十倍の60グラムの高濃度ビタミンCを点滴することで、実は癌は数カ月うちに消えていくのです。

しかしアメリカで最も権威ある総合病院『メイヨークリニック』の研究者が、一流の科学雑誌に「ビタミンC癌治療は効果がない」と発表しました。そのために、ビタミンによる癌治療は否定され、その代わりに抗癌剤ばかりが売れて、製薬会社を儲けさせ、そして多くの癌患者が殺されてきたのです。

ちなみに一番高い抗癌剤「ペグイントロン」は1グラムで3億3170万円です。日本の医療利権は約38兆円、癌利権だけでも国防費の3倍の約15兆円ですから、どれだけ間違った癌治療が誰かを儲けさせ、誰かを殺しているか分かります。

しかし近年、アメリカでは、「ビタミンC点滴治療」が見直され始めております。それでも未だに日本では、この癌治療はそれほど広まっておりません。だから『癌は5年以内に日本から消える!』という書籍を書かれた医師の宗像久男さんは、日本国民にこう呼びかけるのです。

「皆さん起きてくださいよ!日本人は殺されているよ!」

日本人は今なお被害者

教育やマスコミでは、絶対に取り上げられない事実を幾つか述べてきたために、「信じられない!」と、多くの方が思われたことでしょう。しかし「歴史は勝者が書く」、これはよく言われることです。そのために日本の学校の歴史の授業では、「日本人はアジア諸国に侵略を行い、南京で30万人の虐殺を行った」と教わります。

しかし今も昔も民間人への軍事攻撃は「国際法」に違反しておりますが、国際銀行家に蹂躪され尽くした米国によって、東京大空襲、広島、長崎への原爆投下が行われたことで、日本人約60万人が大虐殺されたのです。そして戦後、幾度に渡って「日銀法」が改悪させられて、「大蔵省」も解体させられて、日本は「通貨発行権」を徐々に奪われて、「特別会計」はどこかに消えて、金融的に侵略されてきたのです。

つまり日本がアジア諸国に対して、侵略と虐殺を行ったのではなく、日本こそが国際銀行家から金融的に侵略されて、そして虐殺されたわけです。しかも今でも日本は金融植民地状態にあり、また「癌治療」と称して、年間に約40万人もの大虐殺が行われているわけです。だから冒頭から述べているわけです。「日本人は加害者ではなく今もなお被害者である」と。

誇りを奪ったWGIP

しかしこうした重大な事実にも、日本人に気づかせず、重く苦しい忍耐を続けさせるために、実に様々な洗脳工作が行われてきました。

まず戦後の日本にやってきた、国際銀行家の傀儡かいらいの占領軍GHQは、日本人から「日本人としての誇り」を奪い取るために、「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」、略称「WGIP」を行いました。「WGIP」とは、「日本は侵略と虐殺を行った悪い国である」という洗脳工作のことです。

欧米列強諸国は、白人による人種差別によって、約500年もの長きに渡って、アフリカの黒人たちを奴隷にし、アジア諸国に対しては殺戮と略奪を繰り返してきました。たとえばオーストラリア・タスマニア島の先住民4000人は、ハンティング・遊び感覚で絶滅させられてしまったのです。

実は日本にとって先の大戦とは、欧米列強諸国からアジア諸国を植民地から解放して、白人優位の人種差別を打ち砕くとともに、日本の正当な自衛権の行使としてなされたものでした。ですから日本政府の力が今一歩及ばず、国際軍法違反の原爆を使用した米国に敗れたものの、当時の日本人は、アジアの同胞を解放し、祖国を防衛するために戦ったのです。

しかし「WGIP」の一つとして、戦後に始まった『東京裁判』によって、占領軍GHQは、加害者と被害者を見事に入れ替えました。そして中国共産党もこの『東京裁判』に乗っかって、「南京大虐殺」という政治的宣伝活動を行いました。すなわち『東京裁判』とは、敗戦国と戦勝国の間で、「正義」と「悪」を入れ替えるために行われた詐欺だったわけです。

この「WGIP」に関する文書も見つかっており、今では「WGIP」は、保守系の言論人や歴史学者、さらには『産経新聞』などでは、公然たる事実となりつつあります。

愛国心を奪ったパネルDジャパン

そして「WGIP」と共に行われてきたのが、米国国立公文書館がすでに公表した機密文書「パネルDジャパン」です。「パネルDジャパン」とは、テレビ、ラジオなどを使った洗脳工作のことです。つまり日本のラジオ、新聞、テレビなどを使って、アメリカの文学やホームドラマなどを流すことで、「アメリカこそ民主主義の正義の大国であり、素晴らしい国である」という洗脳工作を日本人に行ったわけです。

しかし考えてもみてください。もしもある国の国民が、学校の教育では偽の歴史を教わり、「貴方の祖国は悪い国である」と潜在意識にまで叩き込まれて、その一方で、映画やテレビなどでは、外国ばかり称賛されたら、果たしてその国の人々の心はどうなるでしょうか？その国の人々の関心は祖国や政治に向くでしょうか？

イングランドの名門サッカークラブで長年監督を務められ、『名古屋グランパス』の監督としても活躍されたアーセン・ベンゲル氏は、私たち日本人に対して、次のように述べています。

「日本ほど素晴らしい国は、世界中のどこにもないだろう。これは私の確信であり事実だ。問題は、日本の素晴らしさ・突出したレベルの高さについて、日本人自身がまったくわかっていない事だ。おかしな話だが、日本人は本気で、日本はダメな国と思っている。最初は冗談で言っているのかと思ったが、本気とわかって心底驚いた記憶がある。信じられるかい？こんな理想的な素晴らしい国を築いたというのに誇ることすらしない。本当に奇妙な人達だ。しかし我々欧州の人間から見ると、日本の現実には奇妙にしか思えないのである。」

私たち日本人が、アーセン・ベンゲル氏から見て、奇妙な人たちに見えてしまうその理由は、「WGIP」と「パネルDジャパン」という洗脳工作が行われたからです。「日本嫌いで外国好きの日本人」を育てるための教育とマスコミを使った洗脳工作、それが「WGIP」であり、「パネルDジャパン」であり、そしてこの洗脳工作は今も続いているのです。

3S政策によって無関心に

私たち日本人を「無関心」にするために、極めつけとして行われたのが「3S政策」です。「3S政策」とは、「Screen（映画やドラマ）」、「Sport（スポーツ）」、「Sex（性）」、これらの「3つのS」を用いることで、日本人を徹底的に「無関心」にする「日本人愚民化政策」のことです。「昭和政治のフィクサー」と名高く、儒教陽明学者、思想家でもあった安岡正篤（やすおか せいとく) という方が、GHQのガーディナー参事官（フルネーム不明）から、「3S政策」の話聞いたそうです。

「3S政策なんて信じられない」と、思うかもしれません。しかしまず安岡正篤氏ほどの著名な方が、ウソをつく理由がありません。また『日本テレビ』の初代オーナー正力松太郎氏が、CIAのエージェントであったことは、すでに米国の公式文書で明らかにされている歴史的事実です。『日本テレビ』と云えば、戦後の日本の野球界をけん引してきた読売グループの一つです。実際に正力松太郎氏は「ポダム」日テレは「ポダルトン」、読売新聞社「ポブルク」、読売巨人軍は「ポヒケ」と、CIAのコードネームも明らかになっています。

戦後の日本では、たしかに駅という駅に、街頭テレビが設置されて、プロレスを流し、日本国民をスポーツに釘付けにしたのです。

そして現実には、現在の日本の大半の人々が、「3S」にばかり関心が高い一方で、「政治」には「無関心」です。日本のサラリーマンが仕事中でも、「ワールドカップ」のサッカーの結果には、熱い「関心」を寄せても、「選挙」の結果には「無関心」なことなど良くあります。

税金、金融、医療の詐欺以外にも、これから始まる可能性が高い「水道詐欺」、すでに行われている「食料詐欺」など、日本では多くの詐欺が横行しています。その結果、日本人が貧しくさせられ、不健康にさせられ、時には殺され、不幸せにさせられております。にも関わらず、日本人は今もなお「沈黙」を続けています。この「沈黙」こそ、「日本国民に3S政策が行われてきた最大の証明である」と、そう言えるのではないのでしょうか。

シープルにさせられた日本人

日本人は様々な詐欺被害に遭いながらも、多くの洗脳工作によって、「無関心」にさせられ、「無知」にさせられ、「沈黙」させられておりますが、この「無関心」、「無知」、「沈黙」こそ、「シープル」の特徴です。「シープル」とは「羊 (sheep)」と「大衆 (people)」という2つの言葉を組み合わせた現代の造語です。

羊という動物は、「一頭の羊を捕まえるより、百頭の羊を捕まえる方がたやすい」と言われるように、とても警戒心が強く、臆病で、群れていないと生きていけない生き物です。そのために羊飼いは、先頭を歩く羊さえ誘導できれば、後に続く羊の群れは簡単に誘導することができます。

2017年のトルコで、1匹の羊が崖から飛び降りると、残りの79匹も、まるで気が狂ったかのように後を追いかけて崖から飛び降りて自殺したことがあります。羊飼いが止めようとしても、まったく言うことを聞かなかったそうです。同じような羊の自殺は2005年にも起きており、400匹以上が自殺し、2010年にも50匹以上が自殺しております。

そして「羊」を意味する「シープ」という言葉は、「眠る」を意味する「スリープ」という言葉に似ています。そのため「眠れない時に羊の数を数える」ということも行われております。すなわち「シープル」とはまさに、「羊の如く眠れる大衆」という意味なわけです。

そして私たち日本人は、「3S政策」などの洗脳工作の結果、「シープル」にさせられてしまっているわけです。

タルムードという家畜思想

では、私たちを「シープル」にして、数々の詐欺を行い、盗み、殺める国際銀行家とは、果たして何者なのでしようか？まず最初に述べておくことは、日本人が加害者ではなく被害者であるように、ユダヤ人も加害者ではなく被害者です。

そして国際銀行家の正体は何者か知りたければ、やはりイエスという方が、今から約二千年前に、どのように「キリスト教」という宗教を新たに興されたのか、その歴史的事実を知る必要があります。

そしてその謎を解くためには、『タルムード』という書物を見る必要があります。この『タルムード』という書物は、一般的にはユダヤ教の聖典と考えられておりますが、しかし正統なユダヤ教の教えからは、かなり逸脱した書物です。なぜならユダヤ教という宗教は、今から約三千年前に、エジプトで奴隷にされていたユダヤ人を解放に導いた預言者モーセによって始まった宗教であり、そして正統ユダヤ教徒たちは、モーセの教え『聖書』を大切にしますが、この『タルムード』は『聖書』とは関係がないからです。

この『タルムード』の思想は、「ユダヤ人だけが人間だ。あとはゴイであり、ゴイムである。だから盗んでも、偽つても、殺しても構わない」という、極端に偏った考え方で貫かれております。「ゴイ」とは「家畜」という意味で、「ゴイム」とはその複数形です。

この『タルムード』成立の千年前、すなわち今から約二千五百年前に、ユダヤ人たちは「バビロニア」という国の首都「バビロン」という所に連れ去られて、強制労働をさせられました。「バビロン捕囚」です。この「バビロン捕囚」の時より、ユダヤ人たちはモーセの教えを捨てて、代わりにバビロニアの宗教、思想、商売の方法を獲得したのです。そして彼らはその思想を口伝で受け継いで、5世紀末になると18冊の書物として完成させたわけです。それが家畜思想の『バビロニア・タルムード』です。

この『タルムード』と対決したのが、ドイツの英雄である宗教改革者マルチン・ルターです。彼はキリスト教・カトリック教会と対立し、「プロテスタント」という宗派を設立しますが、晩年の彼が戦ったのが、実は『タルムード』だったのです。彼は『ユダヤ人と彼らの嘘』という小冊子を書き、それは現代の日本でも売られております。その小冊子の中で、ルターは次のように述べています。

「私はもうこれ以上、ユダヤ人のことも、ユダヤ人に反対することも書かないと決心していました。しかしこの哀れで邪悪な連中が、いつまでも我々キリスト教徒に打ち勝とうとすることを止めないので、ユダヤ人の企てによつてもたらされる被害に備えて、私もユダヤ人に抗議する人々の隊列に加わることを決意しました。【中略】

もし彼らが我々全員を殺戮する事ができるなら、彼らは喜んでそうするでしょう。事実、彼らの多く、特に外科医と医者であるとか称している者達は、キリスト教徒を殺害しているのです。彼らは一時間、あるいは一カ月で死

をもたらず毒を人々に与え、どのように薬を扱ったらよいのか熟達しているのです。彼らは主イエスキリストを激しく冒瀆し、我々の命、健康、名誉、財産を盗む以外、なにも成すことがないゆえに、彼らを厳しく取り扱わねばなりません。」

このルターの言葉からも、なぜ間違った癌治療によって、大勢の日本人が虐殺されているのか、その謎も解けません。そして現代の日本では、会社に飼ひ慣らされ、信念を失い、自分の良心まで捨て、奴隷と化した労働者のことを、「社畜」と呼ぶことがあるようですが、それも私たちのことを「家畜」と見なして、数々の詐欺を行っている者たちがいるからなのです。しかしユダヤ人も加害者ではなく被害者です。

バビロニア式奴隷商法

ユダヤ教には「サンヘドリン」と呼ばれる71人の長老たちから構成されるユダヤ最高裁判権を持った宗教的、かつ政治的な組織が存在しております。そしてこの「サンヘドリン」に従う人々のことを、「パリサイ派」と呼びます。キリスト教の祖イエスは、ユダヤ教徒の中から生まれるのですが、すでにこの「サンヘドリン」が、『タルムード』に汚染されていました。そのためにイエスは、「サンヘドリン・パリサイ派」と対決していく中で、十字架にかけられ、そしてキリスト教が成立していったのです。「神と新たに契約し直す」という意味で、キリスト教の聖典を『新約聖書』と呼びます。そのためにクリスチャンたちは、ユダヤ教の正統な聖典を『旧約聖書』と呼ぶわけです。イエスは『新約聖書』のマトイの福音書の中で、「サンヘドリン」の長老たちに対して、次のように述べております。「蛇よ、マムシの子らよ、どうして地獄の刑罰を逃れることができようか。(マトイ23章33節)」

『旧約聖書』において、悪魔は蛇に化けてイヴという女性をそそのかし、禁断の果実を食せました。そうしたことから蛇という爬虫類の生き物は、キリスト教社会では「悪魔」のように忌み嫌われております。それでもイエスは「サンヘドリン」を「蛇」と呼んだわけです。さらにイエスは言います。

「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。貴方がたは災いである。貴方がたは杯と皿との外側は清めるが、内側は貪欲と放縦とで満ちている。盲目なパリサイ人よ。まず杯の内側を清めるがよい。そうすれば外側も清くなるのである

う。(マタイ23章25〜26節)」

『新約聖書』のマタイ福音書を読むと、イエスがユダヤ教の教会の中で烈火のごとく怒り、両替商の台や鳩を売る者の椅子をひっくり返し、暴れている場面があります。イエスは言います。

「私の家は祈りの家と称えられるべきである、と聖書に書いてある。それなのに貴方がたは強盗の巢にしている(マタイ21章13節)」

清貧思想の強いイエスが、教会で商売していることを批判しているようにも思えるのですが、ここで注目しなければならぬのは、イエスが「強盗の巢」と言っていることです。なぜ「強盗」なのか？それは「両替商」です。

バビロニア式の思想と商法を学んだ「サンヘドリン」は、世の中に出回っている金貨を「俗なる貨幣」と蔑み、一方で教会が売っている木製の貨幣を「聖なる貨幣」として崇めさせ、こちらの木貨を教会に献金することをユダヤ教徒たちに勧めていました。ですからユダヤ教徒たちは、「教会を経済的に支えることは善いことだ」と教わりながらも、教会にお布施をするためには、わざわざ金貨から木製の通貨へと両替しなければなりませんでした。

しかし金貨は希少価値の高いゴールドが無ければ作り出せませんが、木製の貨幣ならば、簡単に作り出せます。そのために「サンヘドリン」の長老たちは、自分たちの思い通りに貨幣を作り出して私腹を肥やしていたわけです。これなどは今現在、国際銀行家が「通貨発行権」を持って、自分のたちの力を高めていることにも似ています。だからイエスは、「強盗」、「蛇」、「マムシの子」という激しい言葉で、彼らを批判したわけです。

「借りる者は貸す人の奴隷となる(箴言22章7節)」、これは『旧約聖書』の言葉ですが、これこそ聖書で禁じられていることであり、そして「バビロン捕囚」で彼らが学んだバビロニア式の奴隷的商法だったのです。彼らはこの「奴隷商法」を重宝すると共に、モーセの教え『聖書』を捨てて、『タルムード』を重宝してきたのです。

蛇の如く賢くあれ

「ユダヤ人」というのは一般的には、「モーセの教え、『聖書』を重んじ、ユダヤ教を信仰する者」という意味です。しかし『タルムード』は正統なユダヤ教の教えではありません。そのために『タルムード』を信望し、『聖書』

を軽んじる者たちは、正統なユダヤ教徒ではありません。そのめに彼らは、厳密にはユダヤ人ではないわけです。では、彼らは何者なのでしょう？『新約聖書』の『ヨハネの黙示録』には、次のように書かれてあります。

「私は、貴方の苦しみと貧しさとを知っている。しかし貴方は実際は富んでいる。またユダヤ人だと自称しているが、実はそうでなく、かえってサタンのシナゴーク（教会）に属する人たちから、ののしられている事も知っている。（黙示録2章9節）」

「サタンのシナゴークに属する者、すなわちユダヤ人だと自称しながら、実はそうでなくて、嘘を言っている者たちに私はこうする。見よ。彼らをあなたの足もとに来てひれ伏させ、私があなたを愛していることを知らせる。（黙示録3章9節）」

「サタン」とは悪魔のことですが、つまり『新約聖書』の黙示録では、「ユダヤ人の素振りをする悪魔教徒がいる」と書かれてあるわけです。信じ難いでしょうが、実は世界には神を信仰するのではなく、「ルシファー」という悪魔を崇拜する者たちもいるのです。彼らは本当に、今でもアメリカのカリフォルニア州モンテ・リオの広大な土地の中で、一年に一度、『ボヘミアン・グローブ』というバビロニア式の悪魔崇拜儀式を行い、モロクという『旧約聖書』において忌み嫌われている悪魔を祀っています。そこにはアメリカ大統領などをはじめ、世界中のエリートたちが集っており、すでにその映像や写真も流出しています。

しかし彼ら悪魔教徒は、あえて「ユダヤ人」を自称することによって、自分たちが犯している罪の責任を、わざわざユダヤ人たちになすりつけています。悪魔教徒たちはそうすることで、もしも自分たちの罪を見破り、批判する者が現れたら、問題を「金融詐欺」や「医療詐欺」から「民族差別」にすり替えて、批判した者に「ユダヤ民族差別主義者」というレッテルを張って、世の中から抹殺するわけです。しかも狡猾な国際銀行家は、実はヒトラーを金銭的に支援して、「ユダヤ人迫害」にも加担していました。

だからユダヤ人は被害者なのです。そしてイエスが十字架にかけられたのも、『タルムード』や「サンヘドリン」と対決したからなわけですが、だからイエスは言うのです。「蛇の如く賢く、鳩の如く素直であれ」と。

情報封鎖によるシープル作戦

実は『タルムード』には、はつきりと「ゴイムには常に偽りを伝え続けよ」と記されております。すなわち彼らからすれば、「獣たちに本当のことなど何も教えなくて良い」というわけです。

アメリカで権威ある大手新聞『ニューヨークタイムズ』を所有するザルツバーガー家は「ユダヤ人」を自称しています。『ワシントンポスト』も、「ユダヤ人」を自称するユージン・メイヤーにより買収され、後に娘のキャサリン・グラハムに受け継がれました。彼女は2001年に亡くなりましたが、『ニューズウィーク』の所有者でもあり、「メデアの女王」とまで呼ばれていました。

実はアメリカの大手新聞というのは、「ユダヤ人」を自称する者たちが所有しているのです。しかも新聞や雑誌などの功績に贈られる「ピュリッツァー賞」までも、その原型を築き上げたのは、ヨセフ・ピュリッツァーという、やはり「ユダヤ人」を自称する者です。

知識や情報は大切です。「税金」、「金融」、「医学」、たったこれだけのことで、本当のことを知っているか知らないかは、個人の人生も、国家の命運も大きくわけます。しかし『タルムード』の思想通り、アメリカもフェイクニュースに溢れ、日本のマスコミや教育も肝心な真実は何も教えないわけです。

日本の大手新聞は『日経』、『読売』、『毎日』、『産経』、『朝日』の五紙ですが、これらの新聞は20ページから40ページ程度で、その中で国際政治を取り扱っているのは、どの新聞もわずか2ページから4ページ程度です。しかし最悪なことに、どの新聞も載せている国際政治の情報は同じで、なおかつ同じ順番でニュースを載せていることも少なくありません。それは国際政治の情報を提供している『AP通信』、『ロイター』、『AFP通信』といった通信社が、そもそも「ユダヤ人」を自称する者たちによって経営されているからです。

「ユダヤ人」を自称している国際銀行家ロスチャイルドの支援のもとに、同じく「ユダヤ人」を自称しているフランス人のシャルル・ルイ・アヴァスという人物によって、1835年に『アヴァス通信社』が設立されました。この通信社が、今なお存続している世界最古の大手通信社『AFP通信』の基になりました。そしてこの『AFP通信』の従業員であり、なおかつ「ユダヤ人」を自称しているポール・ジュリアス・ロイターによって、1851

年に『ロイター通信』が設立されました。

この『ロイター』から、映画『007』でお馴染みのイギリスの諜報機関『MI5』、『MI6』が設立されました。そしてこれらのイギリスの諜報機関の指導を受けて、アメリカの『CIA』、『イスラエルの『モサド』』などの諜報機関も出来てきました。

つまりアメリカの大手新聞のみならず、国際政治の情報を世界中のマスコミに提供している通信社も、さらにはアメリカやイギリスの諜報機関も国際銀行家の手の中にあり、こうして私たちは「情報封鎖」されているわけです。

シオン議定書の狡猾さ

そして兼ねてより「タルムードに関係している」と言われている書物に、『シオンの議定書』というものがあります。1987年に「第一回シオニスト会議」が開催されたのですが、この『シオンの議定書』はその決議文といわれており、その写しが、ロシアの工作員によって持ち出され、漏洩し、世界中に広まったとされています。自動車王ヘンリー・フォードは、この書物を重要視して、わざわざ出版社を設立して出版しました。

しかし『シオンの議定書』は、「タルムードに関係している」と言われている一方で、「ユダヤ人を貶めるために書かせた偽書である」とも定義されています。ただし『シオンの議定書』に書かれている内容が、あまりにも現代社会と酷似していることから、やはり本物である可能性も否定できません。たとえば『シオン議定書』には、こう記されております。

「彼らに事情を悟らせないために、我々は更にマス・レジャーを盛んにする。やがて我々の新聞で『芸能』、『スポーツ』がもてはやされ、『クイズ』も現れるだろう。これらの娯楽は、我々と政治闘争をしなければならない人民の関心を、すっかり方向転換させてしまう。こうして人間は次第に独立して自ら思索する能力を失い、全て我々の考える通りにしか考えられないようにする。(第13の議定書)」

まだテレビのない時代に書かれているために、この中では「新聞で」と書かれてありますが、このように『シオン議定書』には、実は「3S政策」の元になる具体的戦略が記されているわけです。また『シオンの議定書』に

は、こうも記されております。

「我々の計画を達成するには、民衆というものがいかに卑劣で、定見（定まった考え）がなく、軽薄であるかを知っておかなければならない。彼らがどんなに自分の生活と幸福の条件を理解し、尊重する能力に欠けているかを考えておかなければならない。また民衆の資質が盲目的で、非理性的で、判断力がなく、左右どちらでも容易く動かされることを知らなくてはならない。盲人が盲人を誘導すれば、深い淵に落ち込むのは必然である。（第1の議定）」

このように彼らは、我々大衆のことを家畜とみなすのみならず、さらに完全にバカにし切っている可能性があります。だから彼らは、東京大空襲、広島、長崎への原爆投下を行い、平然と日本人を数十万人も殺害するのみならず、「正義」と「悪」を入れ替える「東京裁判」のようなことが、堂々と行えたのでしょうか。そして戦後は、金融侵略を押し進め、「治療」と称して人々を殺害し、「社畜」を量産しているわけです。

『シオンの議定書』について、一説には、彼らがユダヤ人に罪をなすりつけて、問題を「民族差別」にすり替えるために書かれたとも言われております。「信じられない」と思うでしょうが、これらの証拠に、原爆投下の際に活躍した爆撃機B・29の名前は「エノラ・ゲイ」であり、これはユダヤのイディッシュ語で「天皇を屠れ」という意味だそうです。そして『シオンの議定書』の「第十二の議定」にはこうあります。

「どんな情報も、我々の眼を通さずには公表されないう。世界のニュースは、若干の通信社によって集められ、そこで書き直しされ、初めて各新聞社、諸官庁に流される。現在ある程度まではそうなっているが、やがて通信社が、我々の支配下に属し、我々が許すニュースだけが伝達されるようになるだろう」

すでに述べたように、アメリカの大手マスコミ、世界の名だたる通信社は、ユダヤ人を自称する者たちによって経営されております。そして日本にも『共同通信』、『時事通信』という通信社がありますが、これらが戦後に設立されていることを考えれば、彼らの手の中で経営されていることはご理解いただけるはずです。

「日本人は偶然に無関心になっているのではなく、「日本人は意図的に無関心にさせられている」のです。なぜなら悪魔教徒たちは、教育とマスコミを最大利用して、私たちに偽りの情報を与え続けることで、「シール」にしているからです。だから日本人もユダヤ人も共に被害者なのです。

過ちを素直に改める

日本人は意図的に、「シープル」にさせられているわけですが、しかし中国の『論語』には、「過ちて改めざる、これを過ちという」、こうした言葉があります。つまり「過ちを犯したことよりも、悔い改めず反省しないことこそ最大の過ちである」という意味です。

たとえ様々な洗脳工作が、私たち日本人に行われてきたとしても、その結果、私たち自身が「シープル」となってしまうことも事実です。ならば私たちは、自らが犯している「シープル」という過ちを、素直に認めるべきではないでしょうか？やはり「蛇の如く賢さ」で悪魔の狡猾な戦略を見抜くことも大切ですが、しかし「鳩の如く素直さ」も、素晴らしき人生を生きるためには大切なことです。

「貧しい人の中でも最も貧しい人々に愛を与えたい」と語り、インドのスラム街で奉仕活動を続けたマザー・テレサは常々、「愛の反対は無関心である」と語っていました。そしてたしかにこの国には今、意図的に築かれた「無関心」があります。

若者の死因第一位は「自殺」であり、政府は「自殺者の数は減っている」と発表していますが、しかし遺書がなく「自殺」と断定できない場合、「変死」にされており、年間の変死者は約15万人です。国内ではあらゆる詐欺が横行し、政治家も、官僚も、マスコミも腐敗し、国外からの圧力も強く、はるか遠い聖地エルサレムでは、世界大戦の兆しさえ見え始めている混乱を極める時代……。そして意図的に築かれたとはいえ、愛の反対である「無関心」がたしかに存在しています。ゆえにこそ、スラム街からやって来たマザー・テレサは、高度経済成長を遂げた日本に対して、「日本は貧しい国です」と言ったのでしよう。なぜならたとえ今の日本人が「愛」という言葉を使つたとしても、家族や友人など身近な人々に対する愛ばかりで、同時代に生きる日本人に対する愛、あるいは世界の真裏に生きる人々に対する愛は、なかなか見当たらないからです。

たとえ意図的に築かれたとはいえ、たしかに今の日本には「心の貧困」があります。また哲学者ソクラテスは「無知は罪なり」と言いましたが、意図的に築かれたとはいえ、たしかに「政治的無知」もあります。その結果、今の日本には、最大の悲劇の「沈黙」もあります。

「過ちて改めざる、これを過ちという」、これも一つの真理なのです。まずは私たち日本人が、「シーブル」の過ちを、鳩の如く素直に受け入れるべきではないでしょうか？そして私たち一人一人が悔い改めて、「自分には時代を変えるために何が出来るか？」ということこそを、心静かに考えてみるべきではないでしょうか？

なぜなら暖かい毛を作り、仲間と群れる羊が悪いのではなく、簡単に誘導されている私たちに間違いがあるからです。私たちを自殺に追い込んでいる先導は、マスコミであり、教育であり、そして政府ですが、しかし自殺の道歩んでいるのは、私たち自身であるのですから、まず私たちが自らの過ちを素直に受け入れ、そして悔い改めるべきではないでしょうか？

Googleの経営者

テレビ、新聞といったマスコミと教育が、「ユダヤ人」を自称する者たちの手に落ちているとしても、では、「ネット」はどうでしょうか？現在、インターネットの世界において大きな力を持っているのは、やはり『Google』です。そして2015年、世界的シンガーのデヴィッド・ボウイが死の直前、「Googleはイルミナティである」という趣旨のコメントを自身の公式サイトに残していました。「イルミナティ」とは、ページの都合上、この小冊子では詳しく説明できませんが、『フリーメイソン』との関係が噂されている秘密結社のことあり、簡単に言うて国際銀行家の奥の院です。生前のデヴィッド・ボウイは、「sailor」というハンドルネームを使って、公式サイトでファンとやりとりをしており、亡くなる約1カ月前、次のように投稿していました。

『Google』のモットーはデタラメだ。奴らはここ300年で最も偉大な人類へのギフトを破壊している。『Google』はイルミナティであり、イルミナティは『Google』だ。『Google』が支配する未来はファシスト(全体主義)のデリストピアだ。(イルミナティの)反体制派は居場所がなくなり、言論の自由も存在しない。『Google』は闇の国家だ。従来戦争、スパイ、諜報機関はすべて忘れろ。すべての問題は『Google』が支配するインターネットにある。奴らは人々の感情、思考から、我々が得るべき情報の選択、果ては誰に発言権があるかまで決めているのだ。」

このデヴィッド・ボウイの発言が真実のものか、その真相は定かではありません。しかし『Google』には多くの問題があることも事実です。たとえば『Google』の共同創業者はセルゲイ・ブリンとラリー・ペイジの2人ですが、セルゲイ・ブリンは「ソ連出身のユダヤ人である」と自称しています。ラリー・ペイジも、「親はユダヤ人である」と語っています。そして『ニューヨークタイムズ』によれば、2009年にセルゲイ・ブリンは、ユダヤ移民支援協会（HIAS）に100万ドル（約1億円）を寄付しています。

この2人と共に『Google』を引っ張り、「三頭政治」を行ってきたエリック・シュミレットのスローガンは「Don't Be Evil（邪悪になるな）」でした。しかし2014年、突如、エリック・シュミレットは「Don't Be Evilは愚かなルールだった」と語り、『Google』が中国に協力して、中国国内で検閲していることを公表しました。

また共同創業者の2人は、2015年に『アルファベット』という親会社を設立して、『Google』のCEOを、サンダー・ピチャイというインド系アメリカ人へと譲りました。さらに2019年12月には、ピチャイ氏が、『アルファベット』のCEOにも就任することになりました。つまりサンダー・ピチャイが、『Google』とその親会社『アルファベット』のCEOを兼ねることになったわけです。

しかしセルゲイ・ブリンとラリー・ペイジの2人は、親会社『アルファベット』の取締役にとどまり、なおかつ2人合わせて51%の株式と「議決権」も持っています。そのために世間からは、「自分たちは姿を見せず、ただ単にピチャイ氏に表に出して、高額の給料を支払う代わりに、彼を隠れ蓑にするつもりなのではないか？」という憶測が飛び交っており、なぜなら株主がCEOを解任することも、選任することもできるからです。

しかも次のアメリカ大統領選の民主党候補エリザベス・ウォーレンは、共同創業者2人の退任を受けて、ペイジ氏を名指して批判するツイートをしました。「議会での証言はして頂きます。議決権を持ったまま、役職名を変えただけで責任転嫁できるなどと勘違いしないでください」と。なぜなら『Google』には、2016年のアメリカ大統領選挙において、何らの介入が行われていた疑惑がかけられており、そして2018年、ラリー・ペイジ氏は、その件で米上院情報委員会の公聴会への出席を拒否していたからです。そのために大統領候補が、「ラリー・ペイジたちを逃がさない」という趣旨のことを述べているわけです。

新たな人類の強敵

そしてついに2019年8月、『Google』のエンジニアが、「Googleは検索結果を操作していた」と内部告発を行いました。このリークを受けて、トランプ大統領は、次のようにツイートしています。「報告書が明るみになった！2016年の選挙で、ヒラリー・クリントンに投票した人数を260万から1600万へ『Google』が水増ししていた。この情報は、トランプの支援者ではなくクリントンの支援者によって公開された！『Google』は起訴されるべきだ。私の勝利は当初考えられていたよりも圧倒的だった」

アメリカ大統領というのは、この「地球」という惑星の中でも、絶大な力を持っています。そしてその絶大な権力者を決める選挙において、『Google』が不正を行っていた」という内部告発者がついに出たのです。そして現役米大統領が、『Google』は起訴されるべきだ」と述べているわけです。ならばマスコミ、教育、そして政府のみならず、『Google』までも、私たちを自殺の道に誘っていることになります。

『Google』のソフトウェア・エンジニアのザック・ヴォリー氏は、『Google』の「AIプラットフォーム」に政治的な偏見が組み込まれていること、そして同社が「アルゴリズム」を使ってその事実を隠蔽していることを内部告発しました。つまり内部告発者ザック・ヴォリース氏によれば、『Google』は、「表現の自由」があると全世界に見せかけておきながら、実は政治的偏見を組み込ませているわけです。ザック・ヴォリー氏は告発が真実であることを証明するために、『Google』の内部文書950点以上をネットで一般公開しています。ヴォリー氏は『Google』で8年間も働き、年収は26万ドル(約2600万円)の高収入だったそうです。しかし彼は言います。「私には会社に残って、給料をもらい続けたい理由もありましたが、しかし『Google』がこうした計画を実行していることを知りながら、自分の利益のために見て見ぬ振りをしたのならば、私は永遠に自分を許すことが出来なかったでしょう。」と。

かつては『Google』によって情報が広まれば、中国共産党も倒れて、国際銀行家も敗れて、いずれ世界が変わるのでは？」と世界中の多くの人たちが期待しました。しかしヴォリー氏によれば、『Google』には、国際銀行家や中国共産党を優遇する政治的な偏りがあり、他の社員も何が起きているのか知っているために怯えて

いるそうです。

邪悪で狡猾な者たちが、教育、マスコミ、政府を巧みに使いながらも、「ネットは放置する」と考えることのほうが難しく、冷静に考えれば、彼らは『Google』も利用して、「シープル化工作」を行っていることでしょう。その証拠に、『YouTube』の急上昇ランキングは、いつも幼稚なものばかりです。こうして考えてみると、『Google』は一見すると便利で、とても信用できるために、その分、もしかしたら人類にとって最大の強敵なのかもしれません。

ザック・ヴォリー氏は人類に呼びかけます。『Google』は危険である、使用を中止せよ」と。彼がそう述べる理由が良く分かります。なぜならデヴィッド・ボウイが「誰に発言権があるか『Google』が決めている」と述べていたように、政治闘争しなければならない大衆に対して、悪魔勢力の洗脳工作に協力的な動画ばかり急上昇ランキングに載る仕組みになっているように思えるからです。もしくはたとえ政治の一部を語っていても、大衆を目覚めさせて、彼ら悪魔勢力と政治闘争させるほどの脅威には至らない、そうした動画やアカウント、アクセス数やチャンネル登録は伸びるような仕組みになっているように思えるからです。

内部告発者ザック・ヴォリーが述べているように、やはり『Google』は検索結果を操作している危険なものであると知りつつ、上手に付き合っていくべきではないでしょうか？

羊の道から武士道へ

様々なことを述べてきましたが、このように日本には今、中国共産党という軍事的脅威もありますが、これと同時に新聞、テレビ、教育、政府、そしてネットまでを活用する国際銀行家という金融的詐欺も共にあるわけです。そのために私たちは今、「沈黙」という過ちを犯してしまっているわけです。

その結果、現代の常識からすれば、「政治に関心を持ち、時代を変えるために努力する」ということは異常になっています。現代の常識からすれば、「天下国家について語り合い、仲間と共に行動する」ということは異常行動です。しかし悪魔教徒による洗脳工作によって築かれた「現代の常識」こそ、実は異常なのです。なぜならかつての日本

の侍たちからすれば、「天下国家を論じ、行動する」ということは、ごく普通の当たり前のことだったからです。常識が間違っているならば、その常識を変えるまでです。羊は目の前の羊の後を歩みますが、かつての侍たちが歩んだもの、それが武士道だったのです。私たち日本人は、自分たちのためにも、羊の破滅の道を歩むことやめ、武士道こそを歩むべきなのです。

蜂の中でも、ミツバチよりスズメバチのほうが体も大きく強いために、ミツバチにとってスズメバチは天敵です。しかしヤマトミツバチは、もしも巢にオオスズメバチが攻撃を仕掛けてくると、数百匹という集団で襲いかかり、皆で体を震わせて発熱し、オオスズメバチの致死温度にまで上げて殺してしまいます。なぜならわずか数度、ヤマトミツバチの致死温度のほうが高いからです。

羊の如く群れることが悪なのではなく、羊の如く仲間と行動を共にしながらも、ヤマトミツバチの如く強敵に立ち向かうことが、私たちにとって大切であり、それが侍であり、武士道なのです。

もしも日本人が武士道を歩み、侍精神でもって行動を起こし、国際銀行家や中国共産党という強敵に立ち向かっていく時、必ずありとあらゆる詐欺は終わり、日本は繁栄していきます。私たち日本人が武士道を歩み、心により愛と勇気を培っていく時、必ず日本は大いなる繁栄の扉を開き、その日本の繁栄が世界を救うことになるでしょう。かつてキング牧師が、アメリカの差別的な法律を変えたように、真に目覚めた大衆の力は偉大です。眠れる羊の如き大衆は軟弱ですが、しかし目覚め、かつ真理と正義の側に立つ侍集団に勝てるものなど、この世に何も存在していないのです。しかし真に目覚めた大衆と言っても、結局は一人一人です。だから貴方の愛と勇気が、日本と世界を救うのです。根本はまず無関心をやめることです。

決断の時

私ども一般社団法人『武士道』の『You Tube』のアカウントは、すでに『Google』から目をつけられております。けっして自分たちのアカウントや動画を自慢するわけではないのですが、私たちの『You Tube』アカウントには、悪魔勢力に目をつけられるだけの理由があります。たとえばネット上で、「中国共産党の闇」

を批判している動画をよく見かけます。また「国際銀行家の闇」を批判している動画も見かけます。しかしこの二つの闇を同時に批判しているアカウントはなかなか見かけません。

政治には右と左があり、自民党系を「右」、共産党系を「左」と呼びます。そして右の思想を持つ人たちは、左を批判し、左の思想を持つ人たちは右を批判します。しかしすでに紹介した『シオンの議定書』には、「民衆の資質は盲目的で非理性的で判断力がなく、左右どちらでも容易く動かされることを知らなくてはならない」とあります。つまり政治の右と左、どちらも悪魔教徒にとつて利用価値があるのです。

共産思想の生みの親と言われているマルクスが、ユダヤ人であることも見逃せませんし、世界初の共産国家ソ連の指導者レーニンをはじめ、実はソ連の中枢には多くのユダヤ人がいたことも人類は知っておくべきでしょう。

そして悪魔の戦略を的確に見抜いて、左右の間違いを指摘した上で、中道を歩まんとしている動画やアカウントも、まだ一度も見たことがありません。はつきり言つて、このまま自民党が存続しても、日本は国際銀行家によつて、さらに貧しくさせられ、人口が減つて減んでいきますし、左翼共産勢力が日本の主導権を握つても、軍事拡張を進める中国共産党によつて、日本は滅んぶことでしょう。ですから私たち『武士道』は、左右の間違いを指摘した上で、真理を説き、中道を歩まんとしているわけです。

あるいは『タルムード』、『シオンの議定書』を解説し、イエスが何ゆえに「サンヘドリン」を「蛇」や「強盗」と批判したのか、それを明らかにしている動画もなかなか見かけません。そして「3S政策」などの洗脳工作、さらには『Google』の元社員の内部告発まで取り上げているアカウントとなると、ほぼ見当たりません。戦後の昭和のプロレス界のスター力道山から、令和のユーチューバー界のスターヒカキンまで、悪魔勢力の洗脳工作によつて築かれたスターであることを見抜いたのは、おそらく私たちくらいです。

そして悪魔勢力が行っている「シール化工作」の反対にあるものが、武士道であると主張して、その上で「侍精神とは何か？」ということを書いてあるアカウントとなると、おそらく世界に一つしかありません。

武士道とは、日本の神道、中国の儒教、インドの仏教、これら三つの宗教が、日本で奇跡的に融和、習合したものです。武士道こそ悪魔勢力の最も嫌がるものです。この戦いはまさに、神国日本と悪魔との世界の命運をかけ

た戦いだっただけです。これは神々と悪魔の戦いです。

かつてイエスは「蛇の如く賢く、鳩の如く素直であれ」と述べましたが、この言葉は「素直な心を持ちつつも、悪魔の狡猾な戦略を見破り、その上で戦略を立てよ」という言葉にも置き換えられるでしょうが、私たち一般社団法人『武士道』は悪魔を見破りました。そのために、私たちの『YouTube』アカウントや動画は、完全に『Google』から目を付けられており、幾度も動画を削除され、「BAN」も幾度もされており、「BAN」の理由には、「ヌード」とか、「暴力を増長する」など、まったく理解できないものばかりです。

ですから私たち一般社団法人『武士道』は、もはやネットに最大の活路を見出すことはできず、ネットを利用しながらも、原点に立ち返って、原始的に生の声を訴えかけるといったことを行っています。

そして2020年4月から、麻で走る「ヘンプカー」で街宣活動を行います。「ヘンプ」と麻のことです。なぜなら麻は石油に代替するのみならず超越するからです。人類は石油依存からも抜け出すべきであり、そのカギの一つに「麻」があることを、私たちは証明するつもりだからです。「アダム・トロンプリー」という潰され続ける科学者について、お調べいただければ分かりますが、実は「フリーエネルギー」の時代さえ、本当はすぐそこなのです。

そして実際に今、日本中から応援して頂いて、寄付して下さる方、応援にかけつけて下さる方、弁士として街頭演説をして下さる方が増えております。ここにあるもの、それはまさに「沈黙」の反対である「行動」です。一人一人の愛と勇気が、多くの人々の行動に結び付けているのだと思います。そして「金融詐欺」を理解する人が増えております。これが何を意味するか？それは「すでに革命は始まっている」、ということなのです。

しかし「ユダヤ人」を自称する米大統領補佐官のズビグネフ・ブレジンスキーは言います。「大衆は今、政治に目覚め始めており、これは今までなかったことであり、これまでの時代は大衆を誘導することは簡単だったが、今は誘導するよりも、大衆を虐殺するほうが簡単である」と。

決断の時です。ぜひ日本の夜明けのために共に戦ってください。

一般社団法人『武士道』

私たちは共に時代を変えてくれる、熱い仲間を常に求めています。優しく勇ましい侍を求めています。

あるいは、「より優しく勇ましき者に成らん」とする、熱き武士を待っています。

ネットで「一般社団法人『武士道』」と検索していただければ、わたしたちのホームページがご覧になれます。

どうかぜひ仲間になってください。

特に入会金などはございません。

また動画もご覧ください。かならず驚愕の事実に出会われることでしょう。なぜなら本小冊子で述べていることなど、ごくごくわずかなことであり、実は間違った癌治療にとどまらず、もっと大勢の日本人が殺害されてきたからです。

ぜひ、ホームページ、もしくは動画をご覧ください。

動画『癌は本当は治る』 →



動画『金融植民地日本の真実』 →



秘されている真実に気がつき武士道を歩んでください。

一般社団法人『武士道』

100 円程度

※資料の製作支援にご協力下さい。



BUSIDO

「徳」を日覚めさせる啓蒙団体
一般社団法人 武士道

<http://www.busido.or.jp>

